

27

国際コーディネーターの役割 (ICT 活用) と 国際交流カリキュラムの構築

米田 謙三 (羽衣学園高等学校)

1. はじめに

2004年以降、韓国、中国、タイ、フィリピンとの ASPnet を主眼に置いた協同実践の知見の集積を行ってきたが、その数々の成果は文部科学省 (ユネスコ国内委員会)、ACCU から支持をいただくことができた。これら成果には、既存の体験的交流を「学びあう」という継続的な相互成長を図る交流へと転換する内容と方法の開発を含んでいる。また、相互理解における「理解」の概念において「“普遍”と“異なるもの”の価値の発見」にあることなどを含んでいた。これらは、UNESCO が進める ESD を促進する重要な要素として認知される。2006年には、アジア 5 カ国の生徒、そして教員が大阪に集まり、その可能性を討議する交流と会議を開催してきた。これらをもとに協同実践のテーマ「環境と平和」が決められた。

そして2008年、過去の成果 (5 カ国の信頼関係と未来を共に創る理念) を手にしたアジア 5 カ国と、すでにこれらの実践を1989年から行っている BSP (Baltic Sea Project) の先進国であるリトアニア、スウェーデンを含めた 7 カ国でアジア最初の高校生 ESD 国際会議を開催した。国際会議の内容は、各国の ESD の学習内容や実践を報告しあい、これをもとにディスカッションを行って既存の知や態度を止揚していくものであった。

(※) ASPnet の最も大きな特徴は、国内の ASP 校間で、あるいは海外 ASP 校と連携して「学びあい」(Mutual Learning) の協同実践を行う点にある。この多国間で行う協同実践を UNESCO は、Flag Ship Project と命名しており、現在世界には大きな協同実践プロジェクト (Flag Ship Project) が 7 つある。これら Flag Ship Project に加盟している国は 79 カ国あり、いずれも活発に相互に学びあう交流が行われている。しかし、残念ながら日本を含むアジアでは形成されていない。ところで、世界の Flag ship Project の中で最も古くかつ活発なプロジェクトが、Baltic Sea Project であり、バルト海沿岸の環境、多文化、歴史、言語など多様な調査や実践が協同して行われている。さらに、この協同実践の成果を 2 年に一度の割合で「高校生国際会議」を開催して共有している点で、9 カ国間で知の総合化が行われている。最も有名なプロジェクトである。

2. 研究の目的

文部科学省ユネスコ統括部と連携・・・ユネスコスクールのネットワークを活用して、国内また国外の他地域の複数の高校と掲示板などを活用しての ESD に関する取り組みの交流を広げる。国外は中国・韓国・フィリピン・タイ

社団法人ユネスコ協会連盟と連携・・・特に識字問題についてのリーフレット作成をして、国内の他地域の小中高とのテレビ会議や掲示板交流を実施してコンテストなどを実施。ユネスコ世界寺子屋運動を具体的に展開する。

ブリティッシュカウンシルと連携・・・地球市民をテーマに、国外の他地域の中高との掲示板交流を実

施してテーマを深めて交流を深める。ここではおもにグループ交流を実施する。具体的には関西地区高校数校、イギリス数校、韓国ソウル近郊数校で取り組む。交流用掲示板は生徒用と教員用とすでに完成している。

財団法人国際文化フォーラムと連携・・・特にESDをテーマに、コミュニティサイトを使つての交流を深めたい。ここではおもに台湾高雄地区の学校と取り組む。

大阪大学や関西大学と連携・・・大阪大学とは具体的にアメリカの学校との年間を通じて授業の中での交流のサポートを関西大学他数大学とはプレゼンテーション（アジアの高校生とのコラボレーションなど）の共同実施やサポートをお願いする。具体的には8月に実施のワールドユースミーティング（開催地愛知県）と12月に実施のASEP11（開催地台湾高雄）でのコラボレーションプレゼンでの発表を実施する。また11月にはアメリカの学校ともTV会議で文化交流を実施する。またここでLICT研究会を立ち上げ論理的思考力を活性化するように取り組む。



写真1 中国の学生とのESDプレゼン



写真2 台湾高雄の学校とTV会議意見交換

3. 研究の方法 本プロジェクトの方法は、下記の7つの項目でどの実践も実施した。

- (1) 導入 プロジェクトの概要についての説明を実施する。
- (2) ウェブ検索実習 テーマ（例えば、環境や教育や貧困など）についての検索をパソコンなどを用いて実施する。
- (3) 掲示板やBLOGの使い方の理解 使い方やモラルについても理解させる。
- (4) 共通カリキュラム作成 テーマについて意見交換する。互いにテーマを深める。
- (5) 意見交換・発表 リーフレットを作成したり、プレゼンテーション資料を作成したりする。発表についてのいい点・悪い点を意見交換させる。またグループで意見交換（口頭や掲示板などを活用）させる。最終的に自分の意見をまとめさせる。教材の写真を提案する。
- (6) 提案テーマの実施 教育や貧困や環境などのテーマに関して メールや掲示板やTV会議システムを利用して意見交換させる。そして各国で実施する。
- (7) 意見発表・相互評価 TV会議システムなどを利用して 生徒（海外含む）や専門家と授業や意見交換交流をする。最後に発表を各自またはグループで実施、生徒同士での評価をさせる。プレゼンテーション大会や海外研修やコンテストなどにも参加させることにより実際の体験もさせるようにする。（バーチャルな交流とフェイス・ツー・フェイスの交流の各特長と相違、有機的連関について調査し、新しい形態の交流モデルもすすめていくことが可能になった。）

写真2 台湾高雄の学校とのTV会議での意見交換

※意見交換に必要な不可欠な力が論理的思考力と考える。それを身につけるための手法を考えて実施する。

4・5. 研究の内容・経過 4つのタームに分けてそれぞれのタームでどのような実践をするかを明確にした。

第一ターム 学びのフェーズ 時期：4月～7月

1. 国際理解を深めさせる：ユネスコ教材学習（ビデオやホームページや冊子）をさせながらゲストティーチャー来校計画のうちあわせや各交流活動の大まかな計画を立てる。
2. ソフトの事前学習をさせる：具体的に今回は3つ活用する。
 - 1) ブリティッシュカウンシルの掲示板
 - 2) 公益財団法人国際文化フォーラムのコミュニティサイト
 - 3) 大阪大学作成のCMSを活用したサイト
3. カリキュラムに向けたテーマ設定を日本国内で話しあう。
(海外の学校とやりとりも含む)
4. 情報モラルに関する決まりごと(フィルタリングなど) 講演会実施。(生徒・保護者・教員対象)
論理的思考力をつけるために学習パズルを取り入れる。



写真3 ESDの取り組み意見交換ドイツハイデルベルグ



写真4 iPad2などを用いたアメリカとのTV会議

第二ターム 交流のフェーズ 創作のフェーズ 時期：7月～12月

1. TV会議や掲示板を利用し、参加校同士の交流を始める(情報の発信)
(具体的に自己紹介・文化交流にとどまらずにテーマを設定させる。)
2. 大学・産学連携を深める 大学生には授業に入ってもらい映像編集などのサポートを依頼。
スキャナやデジタルカメラ等の周辺装置を利用し、テーマをいくつか取り上げ文章と画像等を組み合わせさせた資料を作成させる。(PC、デジカメ、タブレット)
3. カリキュラムのテーマを決定し、授業案を作成する。
4. 論理的思考力のパズルを実践する。国外にも紹介する。

第三ターム 活動・発表のフェーズ 時期：8月～3月

1. 7月 ドイツユネスコスクール訪問およびパリユネスコ本部訪問 代表2名選出
本校のESDの取り組みをユネスコ本部にて発表、ドイツでは意見交換会実施(環境をテーマ) **写真3**
8月ユネスコスクール中国の学校とコラボして発表資料をまとめ大会で発表させる。
(ワールドユースミーティング) 内容コミュニケーションとESD **写真1**
 2. 9月 ブリティッシュカウンシルの交流プログラム協同発表
 3. 11月 アメリカの学校と大阪大学のシステムを用いてTV会議での文化交流や環境をテーマに発表をさせる。
これから実施予定のテーマのコラボレーションのイメージをつかませる。
 4. 12月 台湾高雄の学校とコラボレーションして英語で発表資料をまとめ大会で発表させる。
(台湾高雄ASEP11) テーマ 市民権
 5. 2月 アメリカの学校と大阪大学のシステムを用いてTV会議での意見交換をさせる。
テーマは自分達のまちの紹介とエコに関して取り組み発表する。
- ※その他 国内のスピーチコンテストやプレゼンテーションの大会などに参加させる。

大阪私学教育情報化研究会主催プレゼン大会やユネスコ協会主催スピーチコンテストなど。

第四ターム まとめのフェーズ 時期：8月～3月

これまでの交流のまとめをファイルなどにまとめる。(PC、デジカメ)他校教員との意見交換を実施。実際に作成したカリキュラムを日本・中国・韓国・フィリピン・タイの学校に配布する。

8月 箕面にて大阪ユネスコスクールのセミナーを実施。中国、タイより生徒と先生訪日。実践をともにする。

1月 大阪府立大学で公開ユネスコセミナーを開催。(大阪府下全高校に実施要綱送付)

ESDカリキュラムの説明、8月のセミナー体験生徒からの感想や学びの報告。

3月 実施した授業のフィードバックをまとめて、また1年間の振り返りをして各研究会と意見交換しながらカリキュラム化の再検討をする。海外との連携をはかる上で必要な項目をまとめる。

6. 研究の成果と今後の課題

この研究では、ESD教育(国際理解教育・福祉教育・平和教育・情報教育)に、思いを持った国内外の学校と連携をした。アジアから欧米までカバーするダイナミックな組織の中で、単独校の活動では得られないプロジェクトベースならではのよさを小・中・高の異年齢交流を通して実感することができた。ただし、この効果をもたらすのは教師(コーディネーター)が子どもたちにさまざまな能力やスキルを身につけさせることはもちろん重要であるが、より大切なのは、その能力やスキルを使って、どのようにこれから生きていくかを考えさせることでした。コーディネーターの役割が大切であるということがよくわかった。また成果物を作成することでは情報活用の実践力を身に付けることが、様々な交流活動ではコミュニケーション・プレゼンテーション能力の向上(海外との交流では英語)が成果としてあげられた。また教員のみならず生徒たちも、価値観に支えられ相手のある達成感、大学生との協同学習の取り組みから、停滞しがちだった学習活動をより活発にすることが可能になった。また一番の成果としてあげられるのは海外の学校と同じカリキュラムを実施することができた点である。お互いがみずから教材を提供しあい、実施した点が特筆すべき点であると考え。お互いに得意な分野の教材を出し合い、それを各国で実施し、意見を共有する。このように、他の学校(国内、国外)や企業とコラボレーションして学習することをきっかけにして学習活動が著しく促進したことなどは、これからの教科と総合が融合したカリキュラム開発の視点の一助にしていきたい。そのためにもさらに教材を増やし、また実施校も(国内でも国外でも)増やしていきたいと考えている。

7. おわりに

高校生が「持続可能な開発のための教育(ESD)」で探求した成果をプレゼンしあい知の交換を実施した。これは、単なる「交換」とどまることなく、各報告をもとに各国の持続可能性に関する課題を、環境、ライフスタイル、文化を切り口として、人と人、人と自然との関係のあり方について「普遍と個別(異なるもの)」を発見するディスカッションの資源となった。これらを日本のユネスコ協同学校(ユネスコ・スクール)が共有することで広く日本のASP校の発展に寄与することになったと確信する。